早稲田商学第 441・442 合併号
2　0　1　5　年　3　月

天野為之と日本の近代化：明治期の経済学者，ジャーナリスト，教育者[1]

池　尾　愛　子

要　旨

開国した日本は，外国の公使や商人を受け入れる一方，外海に船出して国際貿易を開始した。居留地貿易ではメキシコ銀による支払が行われたが，貿易を拡大するためには，通貨制度を確立させ，銀行による支払・決済ネットワークを国境を越えて自前で展開させることが望まれた。明治期に新設された大学でアメリカ人が教えた経済学では，米欧の経済制度が念頭におかれていたので，開国後の日本の経済・財政制度を反映させた経済研究が始まった。さらに欧米語やその翻訳による教育や「西洋化政策」（欧化政策）全般に対する反省や批判が起こり，鎖国中の学問であっても，開国後も通用するものが見つけ出されて初等・中等教育に導入され，日本人による日本人論や文化論が英語で発表されて海外での日本理解が図られた。また経済雑誌の刊行により，内外の経済・金融データや海外事情をより詳しく伝え，国際貿易を含む**実業**の振興が期待さ

(1)　本稿は，南開大学国際シンポジウム「日本近代化過程における改革・社会変動とガバナンス」（天津，2014年９月６－７日，初日午後），日本経済思想史学会例会（慶応義塾大学，2014年10月11日）にて発表した論考の本文に若干の改訂を施し，「終わりに」，参考文献の一部，一連の脚注を追加し，第５節に天野編（1913）からの引用（第38課「特許の話」）を加えたものである。９月６日午前，南開大学の日本史・米国史・ラテンアメリカ史研究室成立50周年祝賀会が開催され，各研究室の現在に至るまでの歴史や新しい歴史の視点が披歴された。1964年，当時の周恩来首相の「外国研究を進めよう」との掛け声に応えて，同首相の出身大学でもある南開大学ではこれらの３つの研究室が設立された。文化大革命の約10年間，研究は停滞したが，その後，関係者の努力により，これらの研究室は再建され徐々に発展拡大して今日に至っている。６日午後と７日午前は，各研究院・センターに分かれて，国際シンポジウム「世界近代化過程における改革・社会変動とガバナンス」が執り行われた。

れた。明治時代末期には，欧米の方が発明により，開国で変わった日本以上に，大きな変化を起していた。新しい実業教育には発明の成果，人の信用，銀行員になるための金言が盛り込まれた。本稿ではこうした「日本の近代化」を天野為之（1861-1938）を通して議論する。

1．序

開国とは，200年以上に及んだ徳川幕府による鎖国政策の終焉を意味する。1843年には中国とイギリスの間で南京条約が締結されていた。1853（嘉永６）年の米艦浦賀沖渡来後，1854年に日米和親条約が締結され，1858（安政３）年に幕府はアメリカ，オランダ，ロシア，イギリス，フランスの五カ国と修好通商条約を締結した。以後，日本は不平等条約の改訂に臨むと共に，大きな経済・社会の変化に巻き込まれることになった。

天野為之（1861-1938）は，創設２年目の東京大学に入学し，経済学などの専門教育をアメリカ人講師から英語で受けた。天野の『経済原論』（1886a）は明治期の経済学書のベストセラーとなり（三橋 1929），彼の『経済学綱要』（1902a）も版を重ねてよく売れたばかりではなく，嵇鏡訳中文版『理財学』（1902b）が上海の文明編訳印書局から発行された。天野の『経済原論』も『経済学綱要』も，現代のマクロ経済学に近い内容といってよい。それらはイギリスの経済学者 J. S. ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）の『経済学原理』を基礎にしているものの，銀行や金融市場の役割にも十分な注意がおかれ，それらの貯蓄と資本の増加（投資）をバランスさせる機能が把握されていたのである（池尾 2012, 2013b, 2014ab）。

続いての第２節では，欧米語やその翻訳による教育に対する反省や批判が起こり，江戸時代の学問から開国後も通用するものが再発見されたことを紹介する。天野は，江戸時代の農業改革者二宮尊徳の教義に早い時期に注目した一人であった（池尾 2013a, 2014c）。第３節では天野の経済学者としての足跡をた

どり，第４節では，天野が経済雑誌の刊行にも強い意欲を示したことをみる。第５節では，天野はそれまでの経験を生かして，中等教育用の『実業新読本』（全５巻）の編著にも携わったことをたどる。『読本』には，国際貿易や銀行業，実業に将来携わることをめざす若者たちが大学に入るまでに獲得すべき基礎知識（世界をどう理解すべきか，世界はどうして変化するのか）が盛り込まれた。

２．日本の伝統への注目と海外への紹介

開国した頃から外国の書物の積極的な翻訳が始まり，経済的には外国貿易に対する禁が解かれてゆき，明治維新を迎えた後，教育現場では江戸時代までの知識が全ていったん脇に追いやられたように見える。しかしほどなく，江戸時代を越えて新しい明治時代においても，教育内容に組み込むべきものが再発見された。新しい日本の将来を支える子供たちのために優れた教科書を著すことが社会的に要請された。

天野為之は彼の『経済原論』（1886a）の売行きが良かったことから，小学校教科書の作成にも関与した[(2)]。いわゆる「鹿鳴館外交」を批判した西村茂樹（日本講道会会長）と協力して『小学修身経』（1894）を作成した[(3)]。同書では，江戸時代の思想家たちである，二宮尊徳，熊沢蕃山，中江藤樹，青木昆陽，新井白石のほか，倹約を専らとする商人が模範とされ，富裕者には人倫を尊ぶ行動が期待された。「国の富強を増さんとせば，内に農工の業を進め，外に航海貿易の業を盛んにするべし」（第１巻第33課「公益」）との一節に，明治日本の課題が凝縮された。

---

(2)　浅川・西田の『天野為之』（1950: 168-9）には，天野の最初の作品『経済原論』が大成功を収めたので，出版社の冨山房が，中学，小学校用の教科書出版の計画を立てて，天野に執筆を求めたとある。天野の『経済原論』は冨山房にとっても初めての出版書籍であった。冨山房インターナショナル（2013）および冨山房（1936）参照。

(3)　1886（明治19）年，日本講道会会長の西村茂樹は鹿鳴館外交に代表される欧化主義を批判し，翌1887年には日本講道会を日本弘道会と名称を改め，「日本道徳」を広める活動を開始した（見城2009: 182）。

二宮尊徳（1787-1856）の場合，彼の仕事が地域に限定された称賛を越えて全国的に普及していく契機となったのは，1880（明治13）年，旧相馬藩主相馬充胤（みちたね）が上奏して富田高慶の『報徳記』（和装８冊）等を献上した時になる。『報徳記』は1883年に宮内省で刊行されて知事以上に配布され，1885年に農商務省版が出て省内の必読書となり，1890年に一般普及版として大日本農会版が登場する(4)。農商務省は，現在の農林水産省，経済産業省，総務省の一部を合せた巨大な省であった。

天野が熱心に読んだのは，富田高慶著『報徳記』(1883）であった。1912年に，東京高等商業学校とオックスフォード大学で学んだ好本督（1878-1973）による英訳が *A Peasant Sage of Japan: The Life and Work of Sontoku Ninomiya* と題してイギリスで出版された(5)。『報徳記』では，尊徳の伝記と，尊徳と彼の弟子たちによる仕法の活動があっさりと描かれている。仕法とは，藩や村の経済建直しをさす。英訳でも，尊徳たちが村人の勤労意欲を引き出すように撫育（教育・訓練）していたことが読み取れる(6)。

福住正兄は，尊徳に随伴していた時に聴いて書き留めていた教訓を『二宮翁夜話』としてまとめた。1884-87年に和綴じ全５巻の静岡報徳社版が，1893年

---

(4)　本稿では，佐々井典比古が事実にかかわる補注を追加した現代版『補注 報徳記』(1954）を参照した。

(5)　1912（明治45）年の『斯民』第７編第２号に掲載された匿名紹介記事「英文報徳記英京倫敦に出版せらる」によれば，好本督は早稲田大学で英語を教えていたことがある。「訳者好本氏は，天性大に博愛の精神に富んだ人で，東京高等商業学校の出身なるにも拘はらず，特に慈善事業を研究せんが為に，早くより英国に渡つた人である。さうして慈善事業の中でも，殊に盲人救済の専門家である。日本で盲人研究家としては，恐らく氏の右に出づるものはなかろう。目下英国のオクスフォードで，富士屋といふ雑貨屋を開いて居つて，其利益は悉く之を盲人の救済及教育の為に費して居る篤志な人である。加之（しかのみならず），多年英国に在留して居るので，英語には極めて熟達して居つて，嘗て早稲田大学で英語を教授して居つたともあるのである。されば『報徳記』の訳者としては最も其（もっともぞの）人を得たものと言はねばならぬ。」(pp. 8-9)

(6)　カナダ・トロントのアームストロングによる『夜明け前：二宮尊徳の生涯と教訓』(Armstrong 1912）は，英語で書かれた最初の尊徳伝である。同書は，1912年の『斯民』第７編第２号の記事「英文報徳記英京倫敦に出版せらる」(p. 12）で紹介された。Bellah（1957）は近代以前の宗教に注目する文脈で，石田梅岩と二宮尊徳を論じた。Takemura（1997）は仕事観・勤労観を通して石田梅岩と二宮尊徳を論じる一方で，尊徳の教義をマクロ経済学と親和性を持つ形で整理した。

に報徳図書館による普及版が利用可能になった。山県五十雄（1869–1959）による英語版 *Sage Ninomiya's Evening Talks* が1937年に出版された。『二宮翁夜話』は神道，仏教，儒学（儒教）の教えも反映しているのだが，英語版ではキリスト教用語が多用された(7)。言うまでもなく，遡るほどに英語自体がキリスト教の影響を受けているので致し方ないが，貯蓄につながる「推譲」に充てられた英訳「concession（譲ること）」は申し分ない。

以上の英訳では，尊徳の「分度」がうまく英訳されていなかった。池尾（2014）第８章で，「分度」を「computable general equilibrium and sustainable growth」（計算可能な一般均衡・持続可能な成長）と訳した。尊徳の「仕法」では，詳細な調査をして，藩や村の経済の最適貯蓄率，最適税率つまりは財政の最適規模を実際に算出して，財政均衡を達成できるような藩や村の財政再建・経済基盤再構築を計画・実施していた。そして，効率的な灌漑システムの構築，新田開発，自然との融合を義務づけていたのである。

変化の大きな時代については，同世代の活動に注目するとよい(8)。内村鑑三（1861–1930）は東大予備門から設立２年目の札幌農学校に進学した。1894年に *Japan and the Japanese*（日本と日本人）を公刊し，西郷隆盛（新日本の創設者），上杉鷹山（封建領主），二宮尊徳（農民聖者），中江藤樹（村の先生），日蓮上人（仏僧）を英語で紹介した。近世の経済政策をみる場合，上杉鷹山が注目されることがある。しかし天野が上杉に注目しなかった理由は，金融について考

(7)　例えば，the scripture of heaven and earth（天地の経文），the way of Gods（神道），the transgressor of the way of man（人道の罪人），abbot（和尚）などがわかりやすい。

(8)　天津シンポジウムにおいても，天野為之（1861–1938）の同世代である，内村鑑三（1861–1930），新渡戸稲造（1862–1933），岡倉覚三（天心，1863–1913）に注目した。すると，中国人研究者から「天保世代みたいですね」とコメントされたので，「天保世代から学んだ世代です」と応じた。幕末・維新期に活躍した人たちの多くが天保年間（1830–43年）に生れていた。天野が万延元年，内村が万延２年，新渡戸と岡倉が文久２年の生れで，旧暦年と西暦年の対応に気をつけなくてはならない。４人とも，日本人や日本の文化・伝統にも注目し，天野以外は英語で日本を紹介したのであった。日本では，1873（明治６）年１月１日（旧暦12月３日）からグレゴリオ暦が施行された。なお，福沢諭吉（1835–1901）が代表的天保世代である。会議論文で福沢に触れなかった理由は，いわゆる脱亜論により，中国での彼の評価がかなり辛いからである。

察された記録がなかったからであろう。内村は1910年に *Representative Men of Japan*（代表的日本人）と題名を変更して再版を出した。

新渡戸稲造（1862-1933）も東大予備門から内村と共に札幌農学校に進学し，1899年には *Bushido: the Soul of Japan*（武士道）をアメリカで出版した。これは宗教教育が日本で行われていないことを訝ったヨーロッパ人に反論するための，一種の日本文化論であった。平和主義者の新渡戸は『武士道』により国際的に有名になり，1919年に国際連盟事務次長に就任した（草原 2013）。

東京大学を卒業した岡倉覚三（天心，1863-1913）は，日本の伝統文化を海外に紹介しようとするフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908, 次節参照）に協力することになる。フェノロサはボストン美術館にオリエンタル・セクションを開設するのに努力し，岡倉はセクション担当者となる。岡倉は1906年に *The Book of Tea*（茶の本）などを出版して，世界に日本理解を広げた。

3．天野為之と経済学

父松庵が唐津小笠原家の江戸藩邸詰の藩医（漢方医）であったため，天野為之は江戸生れである。江戸時代の漢方医たちは長崎貿易の利益を享受していた(9)。明治維新の動乱の中で父が病没し，天野は母・弟と共に藩地唐津（佐賀県）に戻った。1871-２年頃の２年弱，高橋是清（1854-1936）が唐津の耐恒（たいこう）寮において英語教育にあたったのだが，若き俊英達の中で最も強い印象を与えたのが天野であった。天野少年にとっても，後に日本銀行総裁・首相・蔵相になる人物との運命的な出会いとなり，雑誌『東洋経済新報』に寄稿するようになった後，密接な関係が復活したようだ。

(9) ベッティーナ・グラムリッヒ - 岡の「藩医と将軍による政策」（Gramlich-Oka 2010）は，江戸城内に勤務する医師工藤平助（1734-1800）に焦点をおき，平助の娘で著述家の只野真葛（1763-1825）の著作から医師や文人たちとの知的ネットワークを再構築して，平助が経済改革と外国貿易（特に薬品輸入）に対する関心を仲間と共有していたことを明らかにした。

天野は，東大予備門から新設２年目の東京大学に入学し，アメリカ人フェノロサから経済学を教授された。フェノロサはハーバード大学出身で，後に日本の仏教や美術を西洋に紹介して有名になる（前節参照；山口 1982, 2000）。彼は来日前に，同大の経済学担当者で貨幣・金融問題の論客でもあったダンバー（Charles Franklin Dunbar, 1830–1900）から助言を受けたと思われる。天野と同級生たちの卒業論文のテーマは通貨，銀行，商業，外国為替等であり，ダンバーと研究関心を共有していたようにみえて興味深い（池尾 2012）。

天野は卒業後，新設の東京専門学校（現早稲田大学）で教鞭を取り始め，そこでの講義をもとに1886年に出版した『経済原論』が25版を重ねて３万部売れ，明治時代の経済学書ベストセラーとなった（木下 2012）。より洗練された『経済学綱要』（1902a）もよく売れた。中文版は嵇鏡訳『理財学綱要』（1902b）で文明編訳印書局から発行された。高田早苗（1860–1938）の『国家学原理』『憲法要義』とともに，清国からの留学生・留学希望者向けに翻訳されたようである[10]。天野はイギリスの J. S. ミルの『経済学原理』を土台にして「経済学とは財の生産，分配，交換，消費を論ずる科学なり」と捉え，効用，資本の増分（投資），貯蓄，交易，通貨・銀行，政策（政府の役割），財政を議論した。

天野は，貯蓄と投資が銀行仲介の金融メカニズムによりバランスすると論じて，現代マクロ経済学で中心となる論点を展開していた。一方，銀行制度が不安定であれば，貯蓄は投資の増加，所得の増加につながらないとする懸念が，後に資産市場の機能不全に着目して不況分析を行ったケインズ（John Maynard Keynes, 1883–1946）の論点と重なりあう。

天野は1891年に，ラフリン（James Laurence Laughlin, 1850–1933）がアメリカの大学生向けに加筆・編集したミルの『経済学原理』（1884）を翻訳する。

⑽　天野『理財学綱要』（1902b）の巻末にある「文明編訳印書局発行図書要目」に，高田早苗の『国家学原理』『憲法要義』が掲げられており，中文版『憲法要義』は国会図書館近代デジタルライブラリーで利用可能である。

同書では，アメリカの経済制度が念頭におかれて，アメリカの経済データを用いた議論が行われており，「学理と実際」が調和していて天野を大いに刺激した。ラフリンは，1878年にハーバード大学に経済学担当者として着任し，後にシカゴ大学の初代経済学部長となる。

天野の経済学はマクロ経済理論を軸として，租税や公債，貿易や商業，銀行や取引所の機能を理論的にかつ実践的に論じ，政府や民間部門で実際に働きたい人々向けに書かれていた。彼はトピックを絞った通信教育用教科書・講述書も作製したが，経済原論，銀行論，経済学研究の方法，為替論，経済史，公債論，商政論，外国為替論，外国貿易論，貨幣論と多岐にわたる書籍がそれぞれよく売れたとされる。天野は『経済学研究法』（1890: 36-37）では道徳的感情をもつことの大切さを説き，「道徳学の最高の教義は決して単純な経済上の利益のために軽々しく見逃されてはならない」ときっぱり述べた（池尾 2013: 51）。

4．経済雑誌の創刊

19世紀末までに，日本では経済雑誌が幾つか創刊され，世論の形成が目指された。自由貿易を支持した『東京経済雑誌』，保護貿易の論陣を張った『東海経済雑誌』がまず注目された（杉原・岡田編 1995）。天野為之は自著『経済原論』の印税を利用して，1889年２月に『日本理財雑誌』を創刊した。創刊号には，天野の「学理と実際」アプローチがよくわかる一節があり，頻繁に引用されるので現代語訳しておこう。

> 一方では学問の光明に照らして事実を明らかにし，他方では事実に基いて学問を確かめ，学問の理論と応用とを相併行させて，実際と学問の両者を関連づけることによって，日本の学問および政治［政策形成］に役立つことを期待する

『日本理財雑誌』自体は天野の第１回衆議院選出馬・当選のため廃刊となるが，天野の経済学の方法にはその後も変化はない。（天野は第２回衆議院選挙では落選した。）

1895年にヨーロッパ帰りの町田忠治が『東洋経済新報』を創刊した時，天野は客員となり，署名入り社説を寄稿して大活躍していく。町田は創刊号での「発行の趣旨」において，「東洋には東洋固有の事情があり，我国には我国固有の国情があり，人間と密接な関係をもつ経済問題に西洋諸国の学説実験をそのまま東洋に応用すべきではない」，内外の事情をふまえて「学理と実際を調和させる」と宣言したといえる。２世紀以上にわたる鎖国の後，開港・開国，明治維新を経て，国際金本位制樹立（２年後に実現）が目指されていた時であった。同誌は社説（金融市場を含む），論説，訪問録（インタビュー），東洋商業時事，欧米経済事情，内外の経済データを掲載し，国際貿易や実業を目指す人々にマクロ経済情報を提供した。不平等条約が（1911年まで）残る中，国際貿易，とくに輸出を伸ばすことが要請されていた。創刊一周年会の出席者の和田垣謙三・鈴木純一郎は，翌年に「経済学攻究会」を立ち上げ，若手を巻き込んで研究交流を推進することになる（東洋経済新報社百年史刊行委員会 1996）。

天野は経済・商業教育の重要性も力説し，大学での商科設立を提言した。力のこもったキャンペーンは明治大学や早稲田大学での商科の新設，東京商科大学（現一橋大学）の設立（高等商業学校からの「昇格」）につながり，彼は1904年２月，早大初代商科長に就任する。実務に明るく，国際化に対応した人材の育成が急がれていた。長崎でオランダ等と制限貿易をしていた時代とは異なり，銀行や取引所を通じる内外の決済のための制度，さらに民間の自由貿易を円滑に進めるために当時は国際金本位制のネットワークに入ることが必要とされた。そしてそれらの仕組みを築いて支える人々，使ってビジネスができる人々を育てなければならなかった。経済的自由主義を生かすには，近代的制度

と，知識・情報を有する人材が不可欠である。加えて，天野たちは「公益」をめざすべしと考えていた。つまり，小さな利益を争って国益に背くべきではないと，海外の取引相手から信を得て，誠実な実業により利益を上げ続けることを期待した。

『新報』は産業界の動向，変化の方向もいち早く伝えた。1906年10月５日号（第390号）の社説「海運業界において燃料の変遷」では，船舶の燃料として，石炭の代替品としての重油の効能が注目された。1907年３月５日号の業界インタビューでは，定期航路の船舶でも重油が燃料として用いられ始めていること，重油が燃料として用いられるようになるにはその供給動向に依存していること，そして石油の用途の多様性が紹介された。

『新報』創刊２年後に『実業之日本』が創刊された。実業之日本社社主増田義一の激励により，天野の『新報』社説を集めて編集した『経済策論』が1910年に同社より出版された。天野の社説のテーマが，租税，公債，外交，貿易，貨幣，銀行，取引所，社会，教育等の下で集められた。関税問題は複雑だったので，「関税問題の経過について」と題して13頁にわたって再整理された。1866年からは日本の輸入品には５％の関税しかかけられないのに対して，欧米諸国は日本からの輸入品に対して自由に関税をかける事ができた。つまり，日本のみが自由貿易を強いられ，欧米諸国は保護貿易を行えたのである(11)。

５．中等実業教育

日本の実業学校の実態をみると，商業教育の端緒を開いたのは，1874（明治７）年４月に大蔵省銀行課中におかれた銀行学局であった。一橋大学の前身である商法講習所，内村鑑三や新渡戸稲造が学んだ札幌農学校も実業教育機関で

(11) ミルの『経済学原理』では，自由貿易が唱えられているが，その例外として幼稚産業保護論がある。後発国の生まれて間もない産業は関税等で保護することが容認され，当該産業が成長した後，関税を下げたり撤廃したりして，自由貿易の原則を適用することが許容されている。しかし，実際に欧米列強が行ったのは，ミルの提唱した原理と例外とは正反対の政策であった。

ある（文部省 1972: 392-3）。20世紀の初頭に，社会の要請に応える形で実業教育制度が改革された。

本節では，天野為之編著『実業新読本』（全５巻，1911，1913改訂）に注目する。天野はそれまでの経験を生かして，中等教育にも心血を注ぐことになった。『実業新読本』は新制度の下，各種実業学校および実業補習学校等の教科書や読書用参考書として編纂されたが，現代の中等教育にも多くが継承されているだろう。天野の実業教育の目標は，開国した日本の人々の幸福・福祉をさらに向上させることであり，そのために国際貿易，近代的銀行業や実業に携わったり，発明を生かして起業したりすることのできる人材を育成する事であった。全巻を通して，交通・通信の革命的進歩が注目され，「堪能なる技術家，老練なる職工の養成」（第３巻，p. 18）も注目された。特に第２巻では，科学による発明が応用されるとまずは生産現場を変化させ，そして消費財の形で商品化されていくと，私たちの生活を変化させていくことが具体例を挙げて力説された。第４巻では各国人の気質が論じられ，また日本の二宮尊徳の生い立ちから最初の仕法の経験までが紹介された。

第１巻の第４課では新井白石を，第５－６課ではジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明，これを応用したジョージ・スチブンソンによる鉄道の発明を紹介する。第7-8課では，若者たちに旅心を植えつける解説が展開する。日本で最初の鉄道が開業したのが，1872年９月，新橋と横浜の間であり，『読本』が出た頃には，東海道鉄道，山陽鉄道が開通していた。「新橋より神戸行の汽車に乗り込み，見送の人々に別を惜む暇もなく，品川，大森等の各駅を経て，50分後，横浜に着く。／横浜は本邦第一の開港場にして，貿易甚だ盛なり」（第１巻，p. 20）。各駅の土地柄，特産物と歴史が紹介されてゆき，地理の勉強にもなる。

第９課は「外国航路」である。開国後の日本は，もっぱら外国船舶を頼りにしたが，日本郵船会社と東洋汽船会社の２つの会社が定期航路を確立した。日

本郵船会社は朝鮮とウラジオストックへの船舶を毎週出していた。同欧州線は，週１回横浜を発し，神戸，門司，香港を経て，赤道直下のシンガポールに寄り，コロンボに到り，インド洋を横切り，アラビヤ海を過ぎ，紅海およびスエズ運河を経て地中海に入り，フランスのマルセーユ港に寄港し，英国ロンドンに行き，遂にベルギーのアントワープを終点とした。ムンバイ線は４週毎に横浜を出港し，神戸，門司，香港，シンガポール，コロンボを経て英領インドのムンバイに至り，棉花等を積載して帰る。米国線は週１回，香港，シアトル両港を発着し，ビクトリアも経由した。政府の命令による特定航路として豪州線もあり，４週毎に横浜を発し，神戸，下関，長崎，香港，マニラを経て，ダウンスビル，ブリスベン，シドニーに寄港し，メルボルンに至った。東洋汽船会社の北米航路は年14回，横浜よりサンフランシスコに直航し，同社の南米航路は年５回，横浜を出発し，神戸，門司，香港，シンガポールを経て，ペルーのカリアオ港に寄港し，チリのイキケ港に至った。そして，「世界は目前にあり」と，若者たちを国際貿易へと水先案内するのであった。

第35課「銀行の話」のように対照的な印象を与えるものもある。社会には金銭を貯蓄しても事業経営の乗り出す才能のない人たちがいる一方で，品性技量共に備わり経営能力も十分あるにも関わらず資金不足の人たちがいる。この２者の間に立って資金を融通するのが銀行である。各人の余裕資金が銀行に集まり，さらに実業家に貸し出されて殖産興業の資金として活用されれば，「衣食住の改良，交通運輸の発達，その他百般の物質的の進歩を見るに至り，ために社会全般の福祉を増進すること極めて大なり」(p. 105)。銀行類似機関はあったものの，近代的銀行は開国以前の日本には存在しなかった。

第40課ではヨーロッパの金融が民間人によって支えられている事を伝え，第42課「銀行に入れる少年に」では金融王ロスチャイルド家の金言を紹介した。18箇条の中には，「事務を取るに当りては瑣末なることまでも仔細に吟味すべき事」，「万事に敏捷なるべき事」，「誠実は極めて神聖なるものと心得てよくこ

れを守るべき事」,「商売上には特に心を用いて決して虚言を吐くべからざる事」,「烈しき酒を断つ事」,「時間を善く用いる事」,「何人に対しても慇懃なるべき事」,「刻苦勉励すれば必ず成功すると確信すべき事」がある。日本の二宮尊徳の教えと通じるものがあり，興味深い（池尾 2013a, 2014c）。

第２巻の第19課「鉄」では，今日の文明における鉄の重要性およびその種類が解説される。鉄は，鍋，釜，菜刀，汽車，汽船に用いられる。第21課「石油及び石炭」では，化学的処理により原油から様々な製品が生産されること，日本は原油を輸入していること，良質・多量の石炭がイギリスの工業化を助けたことなどが語られた。第23課「クルップ工場を観る」では，ドイツの西部ライン川に沿うエッセンという町にある工場の様子，職工のために設けられた素晴らしい施設（庭園，教会他）が描写された。

第30－１課「平賀源内」では，「理化的思想」に富む近世の発明家が紹介された。平賀源内は漢学，医学，数学，蘭学，諸礼，本草学等に通じ，オランダの物理学も学んだ。特に彼が砂糖製造法を考案し，エレキテル（摩擦起電機）を制作して医療器具として用いたことが詳しく紹介された。第34-5課「電気世界」では，「19世紀の文明の半分は電気の力に頼ると言われていたが，20世紀になるとその活用範囲はますます広がっている」とした。電灯，電信，電話，無線電信が登場した。電気で動く電車が近距離鉄道に用いられるようになった。電気は医療行為にも用いられ，エックス線も登場した。

第38課「特許の話」は（2014-５年）現在の発明をめぐる議論と通ずる点があり，興味深いので多少の現代語訳を施したうえで引用しておこう。

> 世に有用なる機械物品を発明し，もしくは在来の物品について新製造法を発明する者は，国家にとって大功労をもたらすといえる。特許とは，発明者にその発明品の製造販売の独占権を与えるものであり，その承諾を得なければ，他人はこれを製造販売することができない。それゆえこの制度

が実施されると，世に有益なる物品を発明する者があれば，その制度の保護を受けて大きな利益をあげられる。この利益こそ，国家が発明者に与える報酬である。封建時代の我が国で発明がほとんどなかった理由は一つではないにしても，特許制度がなかったことがその大きな原因であったことに違いない。かの平賀源内の如きは，非凡の才能をもって，幾多の発明を成し遂げたけれども，その労に報う手段が備わっていなかったために，非常に困窮していて，彼の才能が十分に発揮されたとはいえないのである。（pp. 125-8）

天野は，欧米諸国では特許制度によって発明者の利益が保護されたため，重要な発明が続々として起り，それによって物質的進歩が実現したと考えていた。日本では1885年に特許法が制定され，天野は「世界を驚かすべき大発明」が起るようにと，若い日本人たちの奮闘を期待したのであった。

第４巻の第51課「支那人に学べ」では，シナ人商人の商業道徳の高さを絶賛する，徳富猪一郎筆の一文が収録された。

余の，第一に支那人に敬服するは，その信用を重んずることこれなり。彼等は，数万円乃至数十万円の取引をも，唯一片の口約にてなすなり。しかして，その渝［か］はらざること，厳として実に山岳の如きものあり。この一点においては，さすがの英国商人も，為めに舌を捲きて驚き居れりとぞ。嘗て一たび足を香港に入れしものは，皆その地における支那商人の勢力のいかに盛なるかを，説かざるものなし。しかしてその重なる原因は，その商業的信用の鞏［きょう］固なるにあること，また具眼者の常にいふところなり。（p. 151）

中国の商人たちは『読本』においてこのように絶賛されていた。

第５巻では，日本が開国して大きな変化を経験したが，貿易や外国人との交流から利益があったことが伝わってくるとともに，その後も発明による変化が起るであろうとの予想が示された。

６．おわりに

天野為之を通して「日本の近代化」を振り返ると，幕末の開国から明治時代にかけての大きな変化が見えてくる。国際貿易により，日本で生産できなかったり生産効率が悪かったりしたものについて，海外から輸入することができるようになった。国際貿易はまた市場の拡大をもたらして，生糸のように輸出するために生産を増加させられたものもあった。かくして，開国は日本に大きな利益と変化をもたらした。換言すれば，鎖国時代には，日本は国際貿易の利益を享受できなかったのである。さらに，科学研究から発明が起り，発明が社会に物質的進歩をもたらすようになった。そして，貿易により世界に変化が広がっていくのであった。

『早稲田大学商学部百年史』（商学部百年史編集委員会編 2004）において，天野は初代商科長以上の存在として描かれている。天野の情報ネットワークは，早稲田大学商科の同僚教員，講師，天野が講師として教鞭をとった大学の教員たち，天野の教え子たち，天野に講演を依頼した人々，『東洋経済新報』の編集部と寄稿者・取材対象者たちと，すこぶる広かったことが指摘される。こうしたネットワークが，論文や書籍とともに，天野の知識と情報，そして彼の考察を支えていたことであろう。商業教育をめぐって激論が闘わされていたおり，「これぞ，商業教育なり」，「これこそ，実業教育である」と手本を示すべく編纂されたのが，『実業新読本』（全５巻，1911，1913改訂）であった。同書は天野の知識と思考の結晶であるだけではなく，現在の普通教育にもその精髄が多く継承されているのではないだろうか。

明治期の知的ネットワークのハブにいたような天野が長きにわたり忘却され

ていたが故に，同時期の研究が進めにくかった可能性がある。そのため外国の日本研究者から，日本の社会科学が実態とは幾らか距離のあるイメージでとらえられた可能性が高い。それゆえ，明治期の研究が今後さらに進むことが大いに期待されるはずである。

後記　資料収集と事実確認に際して，南川良典氏（早稲田実業），横山将義氏（早稲田大学），藤原洋二氏（早稲田大学）の協力を得た。記して感謝する。本稿は，文部科学省2012－14年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号24530408）および早稲田大学2014年度特定課題研究助成費を受けた研究成果の一部である。

参考文献

天野為之（1886a）『経済原論』東京：冨山房．複製版，早稲田大学，1961年.
天野為之（1886b）『商政標準』冨山房.
天野為之（1890）『経済学研究法』博文館.
天野為之（1901）『勤倹貯蓄新論』（講義）寶永館書店　東洋経済新報社.
天野為之（1902a）『経済学綱要』東洋経済新報社.
天野為之（1902b）啓鏡訳『理財学綱要』上海：文明編訳印書局. 国会図書館近代デジタルライブラリー.
天野為之（1910）『経済策論』実業之日本社.
天野為之謹輯・西村茂樹校定［1893］（1894）『小学修身経：尋常科生徒用』冨山房.
天野為之謹輯・西村茂樹校定（1894）『小学修身経：高等科生徒用』冨山房.
天野為之編著（1913）『実業新読本』（全５巻）訂正再版，冨山房．初版，1911年.
Armstrong, Robert Cornell (1912) *Just Before the Dawn: The Life and Work of Ninomiya Sontoku*. New York: Macmillan Company.
浅川榮次郎・西田長壽（1950）『天野為之』実業之日本社.
Bellah, Robert Neelly (1957) *Tokugawa Religion: The values of pre-industrial Japan*. Glencoe, Ill.: Free Press. 池田昭訳『徳川時代の宗教』岩波書店，1996年.
福住正兄筆記（1893）『二宮翁夜話』静岡：報徳図書館．福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂（1941）岩波書店．二宮（1970）に児玉幸多訳が収録。中央公論社，2012年．*Sage Ninomiya's Evening Talks*, tr. by Isoh Yamagata, Westport, Conn.; Greenwood Press, 1937.
冨山房（1936）『冨山房五十年』冨山房.
冨山房インターナショナル（2013）「『冨山房』のあゆみ」（2013年12月16日 YouTube 公開，http://www.youtube.com/watch?v=EDHpcTIGeaQ，2014年11月15日アクセス）.
Gramlich-Oka, Betina (2010) 'A domain doctor and Shogunal policies'. In Gramlich-Oka and Smits eds *Economic Thought in Early Modern Japan*, Leiden and Boston: Brill, pp. 111-156.
池尾愛子（2012）「天野為之と『マクロ経済学』の形成―経済学史上の再評価」『早稲田商学』（431）：645-683.
池尾愛子（2013a）「天野為之と二宮尊徳の教義：推譲，仕法，そして経済教育」『報徳学』（10）：45-60.
池尾愛子（2013b）「天野為之」『エコノミスト』９月24日号，pp.48-49.
Ikeo, Aiko (2014a) *A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century*. London: Routledge.

Ikeo, Aiko (2014b) 'Tameyuki Amano and the Teachings of Sontoku Ninomiya: The Japanese Foundation of Modern Economics', presented at the 17th World Congress of International Economic Association, 6 - 10 June 2014, Dead Sea, Jordan. http://www.webmeets.com/files/papers/IEA/2014/279/Ikeo-IEA2014b-Amano-Ninomiya.pdf

池尾愛子（2014c）「日本の実業教育の源流 - 天野為之と二宮尊徳の教義」国際二宮尊徳思想学会第６回大会，北京・清華大学，10月18–19日.

見城悌治（2009）『近代報徳思想と日本社会』ぺりかん社.

木下恵太（2012）「2011年度秋季企画展『早稲田四尊生誕150周年記念天野為之と早稲田大学展』」『早稲田大学史記要』43: 191-207.

草原克豪（2013）『新渡戸稲造：我，太平洋の橋とならん』藤原書店.

Mill, John Stuart (1848) *Principles of Political Economy: with some of their applications to social philosophy*. London: J. W. Parker. The seventh edition, 1871. 末永茂喜訳『経済学原理』全５巻，岩波書店，1959–63年.

Mill, John Stuart (1884) *Principles of Political Economy*, abridged, with critical, bibliographical, and explanatory notes, and a sketch of the history of political economy by J. Laurence Laughlin, New York: D. Appleton. 天野為之訳『高等経済原論』冨山房，1891年.

三橋猛雄（1929）「経済文献年表」．吉野作造編『明治文化全集』第９巻「経済篇」東京：日本評論社，519-545.

文部省（1972）『学制百年史』帝国地方行政学会.

二宮尊徳（1927-30）『二宮尊徳全集』（佐々井信太郎 編輯委員代表）全36巻，掛川町（静岡県）：二宮尊徳偉業宣揚会.

二宮尊徳（1970）『二宮尊徳』（児玉幸多責任編集，「日本の名著」第26巻）中央公論社.

新渡戸稲造（1899）*Bushido: the Soul of Japan*（武士道）．Leeds and Biddle Company.

岡倉覚三（1906）*The Book of Tea*（茶の本）．New York: Fox, Duffield.

杉原四郎・岡田和喜編（1995）『田口卯吉と東京経済雑誌』日本経済評論社.

高田早苗・岱鏡訳（1902）『憲法要義』上海：文明編訳印書局．国会図書館デジタルライブラリー.

内村鑑三（1894）*Japan and the Japanese*（日本と日本人）．Tokyo: Minyusha. Elibron Classics Replica Edition, Lexington: Adamant Media Corporation, 2014. *Representative Men of Japan*（代表的日本人），Tokyo: Keiseisha, 1908.

山口静一（1982）『フェノロサ：日本文化の宣揚に捧げた一生』上下，三省堂.

山口静一編（2000）『フェノロサ社会論集』京都：思文閣出版.

富田高慶著［1883］・佐々井典比古訳注［1954］（1976）『補注 報徳記』（上下）（改版）（現代版報徳全書１－２）一円融合会．*A Peasant Sage of Japan: The Life and Work of Sontoku Ninomiya*, tr. by Tadasu Yoshimoto, London, New York, Bombay, and Calcutta: Longmans Green and Co., 1912.

Takemura, Eiji（竹村英二）（1997）*The Perception of Work in Tokugawa Japan: As study of Ishida Baigan and Ninomiya Sontoku*. Lanham, New York, and Oxford: University Press of America.

東洋経済新報社百年史刊行委員会（1996）『東洋経済新報社百年史』東洋経済新報社.

商学部百年史編集委員会編（2004）『早稲田大学商学部百年史』東京：早稲田大学商学部.